

「大切な家族」

田尻小 五年

星野

弦光

「ばあちゃん、また来るね。」

病室を出るぼくは、毎日声をかけた。

今年の夏、ぼくのおばあちゃんは二十日もの間、手術のため入院した。「脊柱管狭窄症」という病気になる、てしまった。おばあちゃんは、数年前から「と足腰の痛みをう」たえており、薬を飲んでも「ロ」注射を打っても治らず、ついに手術にいたった。ぼくは手術に

対して怖いイメージがあったけれど、それでおばあちゃんが悩まされていた痛みがやわらぐなうと思いい、手術を応援しようと思った。

手術前、いつも以上に緊張しているおばあちゃんかベットのの上にいた。ぼくは「大丈夫、ぼくが付いているよ」という気持ちでこめて手をにぎった。その後、長時間にわたり手術が行われた。

手術後のおばあちゃんは、点滴や心電図、下半身にはいくつかの管を付け、身動きがと

れない状態だった。ぼくはその苦しもうにしている姿を見ているだけだんだんとつらくなった。でも一番つらいのはおばあちゃんだと思いい、ぼくに出来る事は何だろうとさかした。とどかない物をとってあげたり、食よくの出ないおばあちゃんに食べさせてあげたり、水道まわりをきれいにしたり、なにより毎日顔を見せて元気づける事が、ぼくのゆいいつでぎる事だと思った。

たくさんの痛みをのりこえ、やっと思院で

きたおばあちゃん。家に帰ってくるよ、今までお世話になっただと言いい、目から涙がこぼれた。その姿を見て、ぼくも泣きそうになった。

ぼくはこの夏身近な人が大変な思いをした事で、相手を思いやる気持ち強くもつ事が出来た。人は一人では生きていけない。だけれど支え合い助け合っていく。その一番近くにあるものが「家族」。ぼくも家族の一員として、これまで助けてもらった事に感謝し、これからも大切な家族を支えていきたいと思う。